

### 来訪者に楽しんでもらいたい



毎年秋に1,000株以上のダリアが咲き競う黒川ダリヤ園。12年前から、地元農家を中心とした黒成会が整備しています。

「近年の異常気象や獣害の問題から育てるのが難しい場所ですが、手間を掛ければ美しく咲いてくれるんです。球根を植えてからは、毎日作業に来ます」

開園期間には、毎年1万人以上が来訪。姫路から訪れるリピーターもいます。

「黒川まで来てくれるのはありがたいこと。楽しんでもらえるように、きっちり整備していきたいです」

同園ではダリアの種を来場者に配布しています。

「種から育てることは難しいですが、『きれいに咲きました』と報告してもらえると、こちらもうれしくなります」



黒成会 会長  
目加田 一作さん

### 黒川の味が詰まった弁当

黒川ダリヤ園を訪れた人に、おもてなしを集めたのが、地元の女性で結成したクローバー会です。昼食に困らないように、手作りの弁当を販売しています。

「せっかく黒川まで来てくれた皆さんに、ここで採れるおいしいものを食べてほしいんです。入れたいおかずが多くて、いつも箱にぎっしり詰まってるんですよ」

おひたし、なます、卵焼きなどの定番メニューなど、おかずは6種以上。

「来てくれる人にも黒川を好きになってほしいです。ワンコイン500円までのお弁当が、私たちのプライドです」



クローバー会 代表  
水口 勝子さん



黒川女性会 会長  
島崎 明代さん

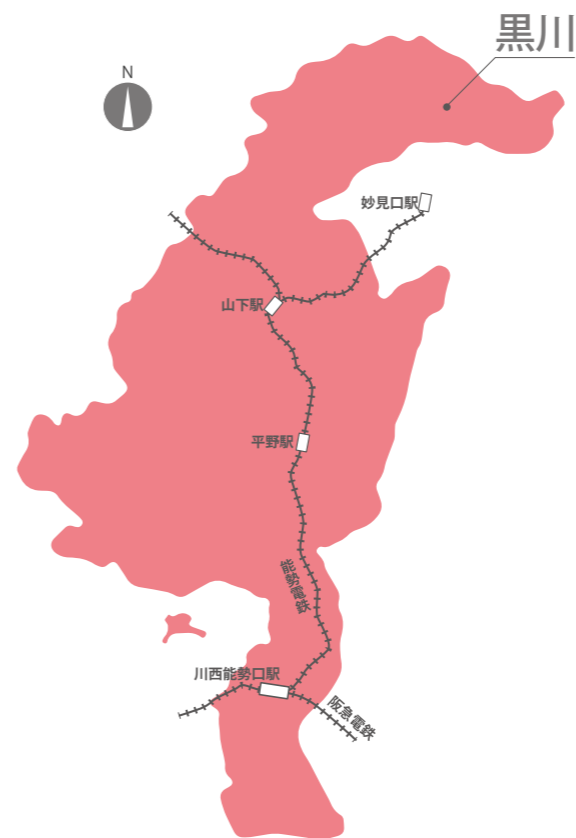
「訪れた人に、里山の景観も楽しんでもらいたい」  
そう話すのは、黒川女性会会長の島崎さん。黒川に住む女性で組織する同会で、黒川の主要道路を彩る花壇の整備を行っています。まち美化プログラム「ひょうごアドプト」の一環です。

「夏場は草がすぐ生えるので、月に2回は集まって手入れをしています。メンバーの年齢層が幅広く、コミュニケーションの場にもなっているんですよ」  
昔ながらの生活文化が色濃く残る黒川地区。自分でできることはやろうという責任感を持つ女性が多いと島崎さん。「よく話し、よく動く元氣な人が多いんです。『日本の里山』といわれ始めたころは、楽しみながいろいろなことに取り組んでいたと聞き

ます。でも、住人が減り、これまで通りに行なうことを負担に感じるようになってしまったんです」  
現在は、楽しめる範囲でやることをやろうと、取り組みを続けています。  
人が減るとともに、黒川に残る文化も消えてしまうかもしれないと、島崎さんは話します。



## できることを自分たちでやる



# 住民が支える 里山の魅力

市の北端にある黒川地区

自然や歴史、文化は

住民の手で受け継がれてきました

**市** 北部に位置する黒川。阪急・能勢電鉄川西能勢口駅から能勢電鉄に乗って、妙見口駅まで30分弱。そこから妙見山へと続く「花折街道」を歩くこと20分。古くから妙見山への玄関口として栄えた黒川地区に到着します。

山に囲まれた黒川地区では、はるか昔から炭焼きがなまりわいとされてきました。山から切り出したクヌギを原料に作られる一庫炭(菊炭)は、茶席で使われる高級炭として重宝されます。クヌギ林は約8年ごとに輪伐されるため、秋が深まるころ、山はパッチワーク状の景観を生みます。

このように、現在も菊炭の生産が続けられ、里山が生活のために利用されていることから、黒川は「日本一の里山」と呼ばれています。

また、黒川には、明治期に建てられた旧黒川小学校の木造校舎が残されており、現在は公民館として活用されています。他にも、知明湖キャンプ場や黒川ダリヤ園などの人気スポットもあり、シーズンには多くの人でにぎわいます。



問い合わせ  
文化・観光・スポーツ課  
☎(740)1161



ヨナナ 店主  
堀部 美香さん

1 児の母。一級建築士の資格を持ち、国内外で活躍。4年前に家族3人で黒川へ移住し、庭の畑で野菜の栽培を行っている。ゆめほたるの講座でコーヒーの焙煎を学ぶ。



1\_ 南インドのカレーの味を再現。スパイスでありながら、日本人の口にも合う味 2\_ 常連客との近況報告に、カウンター越しに会話も弾む 3\_ 店内で焙煎した豆でいれるコーヒー

ヨナナ  
場所：黒川字谷垣内 116-1  
時間：午前 11 時-午後 5 時  
定休日：日・月・火曜日  
電話：090(4036)9041  
年始の営業日は、ホームページ  
<http://yonana477.com> へ

「自然だけでなく、関わる人や活動などを伝えていきたい。このカフェが黒川の今を発信する情報発信基地になって、多くの人に、黒川の自然や活動している人を知ってもらうきっかけになればうれしいです」

「自然だけでなく、関わる人や活動などを伝えていきたい。このカフェが黒川の今を発信する情報発信基地になって、多くの人に、黒川の自然や活動している人を知ってもらうきっかけになればうれしいです」

「ハイカーや地元の人など、少しずつ来てくれるようになってうれしです」  
今後は、自然の中でローストしたコーヒーを飲んだり、インドの文化を広めたりするワークショップもやっていきたいと意気込みます。

黒川に住むようになって、いろいろな人とのつながりができた堀部さん。

黒川を伝える情報発信基地

「ハイカーや地元の人など、少しずつ来てくれるようになってうれしです」  
今後は、自然の中でローストしたコーヒーを飲んだり、インドの文化を広めたりするワークショップもやっていきたいと意気込みます。

# 里山で生まれる新しい魅力

黒川環境を求めている人がいます  
“黒川”でだからできること  
それが新たな魅力を生み出します

自然との生活を楽しむ

スパイスのきいたカレーと自家焙煎コーヒーが売りのカフェ「ヨナナ」が、30年9月黒川にオープンしました。キッチンに立つのは堀部美香さんです。  
「まちでの生活が窮屈に感じられ、自然の中で暮らしたいと場所を探していました。駅から徒歩30分で、これだけの自然があるのは素晴らしい



こと。畑で野菜作りもできて、自然と共に生きていくと感じますね」  
自然の中に住む生活をもっと楽しみたいと、選んだのがカフェでした。  
一級建築士の知識と経験を生かし、自らの手で空き家をリフォーム。毎日少しずつ作業を進め、小さなカフェを完成させました。まきストーブが備えられた店内は、コーヒーの香りで満たされます。

里山カフェ「すみっこ」

## 住人の声から学ぶまちづくり

お借りしている黒川の古民家を訪れた学生は、口々に「懐かしい」と言います。田舎に実家を持っていない学生も同じように口にします。若い世代にとっても、自然と愛着が持てる場所なんですよ。

カフェを訪れた住民の皆さんは、学生たちにいろんな話をしてくれます。住民の声を肌で感じることは、まちづくりを学ぶ学生にとって貴重な体験です。快く受け入れてくれたからこそ生まれた、この上ない学びの場ですね。



近畿大学准教授  
田中 晃代さん

総合社会学部の准教授で、専門は都市計画とまちづくり。2年前から学生ボランティアと、黒川の古民家で里山カフェ「すみっこ」を運営。

隠れ家レストラン

## 山の景色も一緒に味わえる場所

料理を続ける中で、街中ではなく、自然の中で地元の食材を使った料理をしたいと考えようになりました。住んでいる場所にも近く、思い描く環境がそろった黒川で、店を開く場所を見つけたいと探しているところなんです。

黒川や近隣で大切に育てられた野菜を生産者から直接受け取り、どう調理すればいいかと相談して、料理を完成させる。そして、黒川に足を運んでいただいた人に、ここでしか味わえない料理を提供できたらと思います。

料理人

中田 淑一さん

3児の父で豊能町在住。西洋料理を得意とし、食材の声を聞き、生産者の思いを乗せて調理を行う。自身の料理店の開店を志している。



陶芸

## 菊炭が出来上がりを面白くする

陶芸の仕事は場所を選びます。窯で火を使うし、大きな音がすることもありますが、それができたのが、黒川でした。空き家を紹介してくれたり、黒川の昔からのしきたりを教えてくれたりと、黒川の方に支えられて出会えた自分の城です。自宅から通い、10日のうち9日はここで生活しています。

ここでは主に黒楽茶碗を作っています。ガスや電気を使って焼くのが一般的ですが、私は黒川の菊炭の端材を使うこともあるんです。炭を使うと、独特な仕上がりになります。手間はかかりますが、「窯の中の偶然」で面白いものが出来上がるのが楽しみなんです。

茶の湯を楽しむため、正式なお茶会である茶事を開き、友人を招いています。お茶をたてる時にも、黒川の菊炭は重宝しますね。昼に行われるのが一般的ですが、夏の早朝や、冬の日没後に行くこともあり、時間によって移り変わる黒川の景色を味わうのもまた楽しいものです。

陶芸家  
澤田 博之さん

30年前に独立し、黒川で窯を築く。手とへらで形を整える「手びねり」で茶道具を中心に制作。茶道にも精通し、陶芸教室や茶会なども開いている。



澤田博之陶房  
場所：黒川字谷垣内 12-4  
電話：(738)4914  
陶芸教室は随時開催。電話で予約を。



# 共に描く未来

地域住民と新たな協力者でつないだ黒川里山まつり  
新たに黒川を訪れる人と共ににぎわいは続きます

## 出店者も祭りに協力

30年11月4日、「黒川里山まつり」が黒川地区で開催されました。平成18年から続く秋の一大イベント。30年度はこれまでの運営を見直し、実行委員だけでなく出店者も一緒に作って作り上げました。

黒川を盛り上げようと集まったのは40団体。焼きそばの屋台からは香ばしい香りが漂い、体験ワークショップには家族連れが集まります。

黒川に住む有志も協力。採れたて野菜や栗おこわ、豚汁が販売され、開始早々に長蛇の列ができました。

宮城県女川町提供のサンマも呼び水となり、3000人も以上が来場しました。

## 新たな活動に協力

黒川を長年見続けてきた自

治会長の西富正隆さん。今回の黒川里山まつりを振り返ります。

「やって良かったという声を多く聞きます。住人が減っていく中で、祭りを続ける負担はありますが、なくなってしまうと寂しいという気持ちもあるんです」

やるなら参加したい、黒川での楽しみは残したいという声もあると話します。

今、黒川では、農業をしたい、創作活動をしたい、自然の中で暮らしたいという人が、空き家を購入するケースが増えてきました。西富さんの元にも、新たな住人が訪れます。

「黒川の規模は小さいので、派手なことはできないかもしれませんが、でも、こんなことをやりたいと言ってもらえれば、協力していきたいです」



## 必要なのは「人」の力 里山とまちと人をつなぐ

問い合わせ 文化・観光・スポーツ課 ☎(740)1161

## 自然と利便性が両立

現在、黒川に住んでいるのは約40世帯。高齢化が進み、このままでは近い将来、空き家や休耕田が増え、里山を維持することが難しくなっています。

その一方で、黒川ならではの景色、自然、歴史などが地域外の人も魅了しています。

都市部から自然に恵まれた環境を求めて移住を希望する人もいます。特に、最寄り駅から徒歩で行けて、大阪市内から車で1時間のアクセスという好立地にあり、黒川だからこそできることを求めている人もいます。

そして黒川では、何かしたいという人をごく自然に受け

## 多様な人の参画

入れてくれます。有機栽培や泥んこ遊びの場所を求めてやってくる人もいます。

黒川に今、必要なのは「人」です。それは移り住む人だけではなくありません。ビジネスやイベント、子育て、レジャー、森林保全などジャンルを問わず何かやりたい人の行動が、黒川の活気につながると感じています。

市では、今年度から組織を横断したプロジェクトチームで、黒川のまちづくりに取り組んでいます。黒川と地域外の人をつなぎ、土地利用に係る制度を検討。30年12月からは、実践者から他地域の事例を学ぶ「井筒塾」を開き、黒川で何か始めたい人などが交流する場をつくっています。

まだ、ゆっくりと黒川を訪れたことがない人も多いのではないのでしょうか。ぜひ一度遊びに来て、身近にある黒川の魅力にふれてみてください。

ワークショップ作品を展示

## 作家いしいしんじさんが紡ぐ 黒川の物語



## 2月上旬 中央図書館で展示予定 (詳しくは市ホームページに掲載)

「黒川里山まつり」で開催されたワークショップ「巨大絵本を作ろう」の完成作品を展示します。

黒川を舞台に1匹のサンマとワークショップ参加者が登場する物語を、作家のいしいしんじさんが書き上げました。



**いしいしんじさん**  
京都在住の作家。15年に『麦ふみクーツェ』で坪田譲治文学賞を、24年に『ある一日』で織田作之助賞大賞を受賞。代表作は『ポーの話』『悪声』など。

